

フィリップ・デイヴィス『バーナード・マラマッドーある作家の生』(1)

奈良県立医科大学医学部看護学科

勝井伸子

Translation of *Bernard Malamud: A Writer's Life* (1)

Nara Medical University School of Medicine Faculty of Nursing

Nobuko Katsui

はじめに

フィリップ・デイヴィス (Philip Davis) による『バーナード・マラマッドーある作家の生』(*Bernard Malamud: A Writer's Life*) と題するマラマッドの初めての伝記は、作家の死後約20年を経た2007年に、未発表の資料、手紙などを広範囲に駆使して書かれた。戦後アメリカ文学の主流となったユダヤ系作家の一人として重要な位置を占めながら、その私生活はほとんど公にされてこなかった作家の背景を初めて明らかにし、ブルックリンの貧しいユダヤ系移民である食料品店の息子としての苦闘だけでない、生涯を支配することになった不安が、マラマッド作品にあらわれる疎外、囚われ人の感覚と深く関わっていることを明らかにしたのがこの伝記である。バーナード・F・ロジャーズ Jr が書評で述べているように、この伝記はマラマッド作品のより深い理解を可能にする資料としての大きな価値があることは疑いのないところであり、この唯一存在する伝記を訳出することによって、日本のマラマッド研究の一助になることを願っている。本書は368ページにわたるため、何回かに分けて訳出する予定であるが、あくまで全体の趣旨を損なわない範囲で、スペースの都合上やむを得ず省略する部分があることを最初にお断りしておきたい。

「まえがき」

(訳者注:デイヴィスは伝記執筆にいたる事情について次のように述べている)

1986年にマラマッドが亡くなってから、遺族は長いあいだ彼の生涯について書くことに抵抗を示していた。今や彼らはマラマッドの名前が消え失せつつあることを懸念し、マラマッドの読者層も、文学上の位置づけも凋落の危機に瀕していると考えていた。(中略)

(訳者注:デイヴィスは伝記執筆の意図を次のように述べている)

フロイト曰く、「伝記を書けば誰もが嘘、隠蔽、偽善、お世辞、自分自身の理解不足の隠蔽までもしでかすことになる。というのは、伝記的事実などというものはなく、あったとしても役にも立たないものなのだ」これは伝記の愛読者であったマラマッドが二回も引用している文章である。(中略)

かくいう伝記作者たる私は、この本を書くにあたって、フロイトの警告にもかかわらず、二つのもくろみを抱いていた。第一のもくろみは、作品を人生より上位に据えるものの、人生がどのように作品に姿を変えて関与したかを示すことであった。マラマッドの短編は今でも人々に非常によく記憶されているとはいえ、そういう作品は一握りの傑作短編に限られる。これらの短編は素晴らしいものであるが、私はマラマッド自身が最も好んだもの、長編を取り上げたのである。いずれにせよ、私は将来にわたる

マラマッドの評価と読者を獲得したいと考えている。1986年5月17日バーモント州ベニントンにおけるマラマッドの追悼式典において、クロード・フレデリックスは聴衆にこう呼びかけた。「私たちは、人間として、誰もみな、自分の思いそのもの以外のなにものでもないことを忘れないでいただきたい。そして、自分の思いとは言葉であり、マラマッド自身はこの世を去っても、彼の思いを表す言葉は私たちに残されていることを」私は作品を単に要約する以上のことを成し遂げることで、こうした思いをなんとか表そうと試みた。『アシスタント』と『ドゥービン氏の冬』については、当該作品に関する記述がその章全体に及んでいる。他の作品においては、際立った、また最後の部分やクライマックスの部分を取り上げている。

私たちが最終的に「自分の思いそのもの以外のなにものでもない」としても、私はマラマッドの人生のいわば実際の物語を語りたかったのだ。闘いつつ傷ついていた、自力で生きたアメリカ移民二世の物語を。したがって、私の第二のもくろみは、作家という仕事にほとんど宗教的といってもよい感覚をもち、凡庸な人間生活を利用し、かつ犠牲にもしたという意味で、真摯な作家であるとはどういうことなのかを、真摯な読者に示すことであった。スタンレイ・エルキンの妻バーバラが、何か書いているか、と彼に尋ねたとき、その答はまさに彼らしいものであった。「もちろんだ。それが私の生き方だからね」広い意味で、それはまた独学の手段でもあった。つまり、人生から、そして芸術において学ぶ物語なのだ。

作家自身の言葉によれば「^{ヒューマンな}表現」を生み出すことに日々携わっている作家の伝記であるからこそ、『^{ある作家の}生』なのだ。これはベニントン大学で、教師としてのマラマッドが考えていた授業の名前でもある。というのも、それこそマラマッドが人生の多くを費やしてきたもの—彼自身の表現を人間的な表現

にする試み—であり、下書きに次ぐ下書きを繰り返す、そうすることによって彼が何を意図していたのか、またどのようにそれを行ったのかを見せたいと考えている。「^{ヒューマンな}表現」は、1984年のパリス・レビューの「作家の仕事」シリーズにおけるダニエル・スターンのインタビューにおいて、マラマッドが牢獄のモチーフを使うことについて語った言葉にも通じるものである。「私は（牢獄を）あらゆる人間のディレンマを示すメタファーと捉えているといえるかもしれません。私たちが見過ごし、目を逸らす宿命の障壁の。社会の不正、無気力、無知。過去の経験や罪悪感、強迫観念に囚われる個人的な牢獄—言い換えると、ある意味で見る力を失った人々や、自ら見まいとする自我とも言えるでしょう。人間は、自分の自由を構築し、創り出さなければならないのです。想像力は役に立つものです。真に偉大な人間は、自分の自由を創り出す過程で、ほかの人々に対して（自由を）拡大するわけです」宿命からの自由を得ることは、マラマッドにとっては、経験から自分の作品を創ること、記憶から独自の想像力を取り出すことでもあった。彼はつねに自分は想像力と創造性に基づく作家であると主張し、自分の作品の自伝的起源を隠蔽してきた。しかし、彼の人生と作品との緊張に満ちた近接関係と両者の葛藤があるからこそ、彼自身が考えていたよりも、マラマッドは偉大な作家なのだとは私に考えている。

だからこそ、フロイトの伝記に関する警告があっても、彼自身の経験を変容する行為において、創作の過程において、彼がどのように自分自身を作家として確立していったかを考えようとするのは「役に立つ」ことだと、私は考えている。言い換えと称される伝記作家の「嘘」をできる限り避けるために、19世紀の作家の人生の例にならって、自伝の代用物としてマラマッド自身の言葉を引用し、それを彼の家族、友人、同僚、学生の言葉と関連づけるよう努め

た。だから、本書は実のところ共同作業であり、文書やインタビューの形でマラマッドの思い出について述べたものを引用することを許してくれた人々に多くを負っているのである。

このような出会いのなかには、それ自身が皮肉な短編となるようなものもあった。ある人は、血管形成術の直前にあってなお、ありとあらゆるモニターにつながれた病床でインタビューを受けたいと言い張った。彼が耳ざわりのよい善意からの虚偽を語ったとき、モニターの数々を前にして、あなたが嘘をついていることは知っていますよ、と言えるインタビューアーがいるだろうか？また、あるとき、昔の学生だったある女性は、自分とマラマッドについて語ることを実は望んでいなかった。その代わりに、マラマッドと彼女の同級生の間の不道德な行為については嬉々として語ったのだった。この話は、当事者によって、断固として一とはいえ説得力には欠けていたものの一否定された。そういうことは多々起きた。作家のダン・ヤコブソンは、私が多くのユダヤ系老人ホームを訪ねてばかりいたので、いっそのこと住み込んではどうかと言ったくらいである。だが、こうしたインタビューの多くは恩典ともいうべき豊かな経験となった。(中略)

むろん、本書の形式、明示的にせよ暗示的にせよ私の解釈が生み出す結果については、私にその責任がある。しかし、形式については、二つだけ明言しておく必要がある。第一に、本書において、私は少なくとも二つの方向性を持たせようとしている。物語を前もって語り、一方そのことに関するマラマッド自身の記憶によってその物語を語りなおすという形式である。ここではモデルとして、過去と現在、作品と人生、主人公の内面と外側を行き来するという『ドゥービン氏の冬』の形式を用いている。(訳注：『ドゥービン氏の冬』は伝記作家ドゥービンを主人公に据えた小説であり、またきわめて自伝的色彩が強いと考えられている作品でも

ある)第二に、伝記作家が「理解の欠如を隠蔽する」というフロイトの強力な警告に鑑みて、私は集積した証^{モディス}の只中に読者を連れてゆき、欠落、空白や矛盾する不確定性を読者に委ねるよう努めた。「私にできることはした」というのはマラマッド自身のおなじみの返答であった。

とは言っても、残された文書、私がたまたま会えた存命している人々、彼らが思い出すことができ、また公式であれ非公式であれ私に話してくれる気になったことなどに私の記述が依存していることは、痛いほどにわかっている。ジャナ・マラマッド・スミス自身の回想録『私の父は本である』(2006)の助けを得たにも関わらず、そういうことは最初の伝記につきものの危険なのである。アン・マラマッドの助手の一人が私をケンブリッジのマウント・オーバーン墓地へと連れて行ってくれた折りに、ついにマラマッドのなきがらがあると記されている場所を見つけたとき、責任が真正な、また奇妙なほど親密なものであり、ここで必要とされていることは、単に情報を提供する作業などではないことを、私は悟ったのだった。(中略)

マラマッド自身は死後に伝記を望んでいただろうか？厳格で、怒りっぽく、手練手管にも長け、口の重かったマラマッドは、生前は明らかに自分の方法と自分の秘密を守ることに常に努めていた。『ドゥービン氏の冬』の終わりでのドゥービンのように、娘に作家の役割をゆずり渡していたのならば、ジャナが受け取った遺産は彼女の著作『個人的な事柄』(1997)にも表れていただろう。

私(訳注ジャナ)の父である作家バーナード・マラマッドが1986年に亡くなって、彼の文学上の遺産問題を解決することになったとき私はプライバシーについて初めて考えるようになった。母(訳注 アン)は何か決めなければならないときには、私に意見

を求めてきた。母は、父の人生について具体的な事を尋ねる手紙を送ってきた人々に対して、喜んで答えるべきか、拒絶するべきか、決めなければならなかったのだ。たとえば、未完成の草稿を出版するか、それとも研究者のためのアーカイブに収めるか。友人からの手紙をすべてとっておくかどうか。草稿を売るべきか、国会図書館に寄付すべきか？書いたものはすべて将来のしかるべき時が来るまで封印しておくべきか、いっそ破棄すべきか？（『個人的な事柄』、3）

「母（訳注 アン）は伝記作家が電話してきたらどうすればいいかとあれこれ考えていた」私は伝記作家を職業としているというわけではない。私はこれまで述べてきた目的のためにこの伝記を書くのだ。

もしマラマッドが伝記を望んでいなかったのなら、なぜ彼は伝記作家であるジェームズ・アトラスに彼の書斎を見せ、ファイリングキャビネットを開けて見せ、いつの日かこれらが伝記作家にとって重要な資料になるだろうなどと言ったのだろうか？彼はトビー・タルボットが『母についての本』（1980）を書いた後、彼女にいつか彼について書くべきだと言ったのだ。パリス・レビュー紙のダニエル・スターンのインタビュー記事の校正時に、マラマッドはダンが決して聞いたことのない質問を挿入しているのだ。

DS「『アシスタント』の話の元^{ソース}は何ですか？」
M「小説の元についての質問はつまらない質問だが、しかし友人である君には、話しましょう。多くの部分は、食料品店主としての父の人生なのです。かならずしも、私の父でなくてもいいのですが」

父に対する直接そうとは言わない捧げものとしても、ここにはマラマッドにおいて特徴的な

アンビヴァレンス、彼の芸術固有の、暴露と隠蔽の神経質な混在が見て取れる。

マラマッドが望んでいなかったであろうと思われるたぐいの伝記、つまり作品についてはふれないか説明を加えないといった伝記は望んでいなかったことには確信を持っている。

『ドゥービン氏の冬』執筆中に、マラマッドは自分の見た夢をノートに記録しており、そこでは、友人の社会学者アレックス・インケレスに対して、社会学はどれもこれも「あらゆる神秘を説明」しようとする、と文句を言ったとある。説明と定義は人生をあまりにちっぽけなものに還元してしまうが、フィクションとは断固としてそのようなことはしないのである。「ちっぽけなものにする」ということほどマラマッドが嫌ったものはない。彼の人生はつねに意味の卑小化への闘いであったのだ。フィクションこそが、人間の理解への最高の^{コンテクスト}状況を提供するものである一言^{ディスコース}説が個人的なことを、侵害もせず裏切りもせずに、公のものとするのできるのだ。『アシスタント』には、一見単純に見える強い表現がある。常習的な窃盗で嘘つきのフランク・アルパインが、心の深いところで最後には変容したことを知り、改心した善人となったことを知ってもらいたいと望むところのくだけりである。「彼は外を見ることができたのだが、誰も彼の内を見ることはできないのだった」

私自身の見解では、内を見ようとし、マラマッドを正當に扱おうとする伝記は作品から学ぶべきであり、内容だけでなく方法からも学ぶべきであって、読者を作品へと再び向かわせるべきものである。ときには、重要なことを比較として明らかにするために、ささいなことが必要なこともあるのだ。

（中略 訳者注：この部分以降には2ページにわたって、伝記執筆に協力した関係者への謝辞が述べられている。追伸として述べられている部分のみ訳出する）

追伸:このまえがきを校正していた時に一こうしたプロジェクトの性質上避けられないことではあるが一この本の完成以降に死亡した人々の名前を読む悲しみがある。私は2007年3月20日にアン・マラマッドの死亡を記録したときはとりわけそうだった。

第一の生

第一章 継承

1984年4月26日一父と母

1984年4月26日の70歳の誕生日を記念するスピーチ原稿で、バーナード・マラマッドは家族や友人たち聴衆に1934年の自分と、貧しい店主である移民の父マックスとの思い出話を書いている。

大恐慌時代のある日、私はひどい風邪をひいて、仕事もみつからないで、みじめな気持ちで横になっていたら、父が店から上がってきて、ちょっと話をしたあと、私の足を握ってこういった「mir soll sein far dir(イディッシュ語)ー私がお前の身代わりになれたらなあ」私はいつもそのことを忘れたことがなかった。(HRC29.6) (訳注:イディッシュ語とは東欧系ユダヤ人が用いていた言語で、ドイツ語・スラブ語・ヘブライ語が混合した言語であり、文字はヘブライ文字で記述されるが、音をアルファベット表記して用いることもしばしばある)

誕生日の聴衆の中にはマラマッドの友人であり、同僚作家であるダニエル・スターンがいた。3月18日の彼の死の一か月後の1986年4月20日、ニューヨークの92丁目のYMHA(訳注 Young Men's Hebrew Associationの省略形。ヘブライ教青年会と訳される。1854年にボルチモアに最初に設立され、その後アメリカ各地に設立された。92丁目のYMHAは1888年の設立)でのマラマッド追悼式典の際にも、

つまりこの話をきいた二年後にも彼はこれを覚えていた。「Mir far dir というのが文法は間違っているが頭に染みついてしまったんだ。3語のイディッシュ語の詩のようにね」あれは「人間的」と言いたいときのマラマッド流の省略形なのだとスターンは言う。マラマッドはスターンの知るどの作家よりも「人間的」であるということを用いて、そして大切にしていた。「白痴が先だ」において、知恵おくれの息子のために闘う父親が、彼らを滅ぼそうとする力に対して叫ぶ。「この野郎、人間的であるとはどういうことかわからんのか？」マラマッド自身の父親の使うイディッシュ語では、まさに問いかけのアクセントで発話された「人間的」とは「mensch」(訳注:イディッシュ語で「高潔な人」)を指していた。単に男であるとか人間であるとかではなく、道徳的知性と想像力のある親切心を持つ、真に正直な人間として。「mensch」はマラマッドにとって最高の褒め言葉なのであった。

誕生日の数か月後、マラマッドは、1984年10月13日にベニントン大学のベン・ベリット講演シリーズで「長い仕事、短い生」と題しておこなった、通常は見られないほど自伝的な講演で、menschとしての父親の話をした。このときの話は次のようなものであった。

私が20歳のとき、ある朝のこと、食料品店の階段を重い足取りで上がってきた。私は夏風邪をひいていてベッドに横になっていた。職探しをしていたが、うまくいっていなかった。父は私の足を手で包み込んだ。「私がお前のかわりに風邪をひいてやれたらなあ」作家に最も必要なものとは何か?この問題を考えるとき、私は父のことを思う。(TH,32)

最後の文章に込められた、適度に半ば隠蔽された愛は、マックス・マラマッド自身の頑固さと優しさの言葉に表さない混合した感情と関係

している。無口さと告白調の特徴的な混合において、作家が概念からではなく人々から得た、形には表れない思考の様式となっていた。「私は父のことを想う」マラマッドにおけるこの繰り返しは、たんなる繰り返し以上の意味を持っている。彼は、心を捉えて離さない場において、考え、理解する新しいものをその都度発見していたのだ。

だが、マラマッドは'far mir dir'が、父だけの言葉ではないことは知っていた。彼は、1963年9月に、ポーランドとロシアにあり、ナチによって破壊された、ユダヤ人の^{シテットル}集落の文化についての古典的書物『生は人々とともに』(Life With People 1952)を読んでいた。それはある部分では、彼のロシアを舞台とした小説『^{フィクサー}修理屋』執筆の準備ともなった。しかし、それはまた、彼がそれと知らずに継承していた、破壊された伝統の断片を彼の内に集積することにもなった。1963年9月23日にマラマッドはこう書いている。「とうさんやかあさんがアメリカへ来る前にどんな暮らしをしていたのか、初めてわかったような気がする」(HRC 36.6)

親の愛は心配することで表される。父親は男らしく黙って、母親は女らしく気をもんで。心配は甘やかしではなく、愛情の表れとしてほとんど義務に近いものであった。・・・

心配の強さは愛の証しとして、(親であることの)証明であった。「私の身に起きたらいいのに！」とけがをした子どもの母親は叫ぶ。「おまえでなく私だったらよかった！」何も起きていなくても、良い母は気をもむのであり、その心配にこそ魔法があるのだ。それは愛を証明するだけでなく、不運を追い払うだろう。(Zborowski, 294)

マラマッドは男性における情緒的優しさ、父親の言葉に出さない優しさの記憶を愛おしんで

いた。1929年エラスムス高校の同級生であったエリフ・アーマーの手紙の返事の中に、同級生のジム・オリヴァへのメッセージを書いているのだが、彼の父は地元で床屋を営んでいた。「お父さんをよく覚えていると伝えてください。ひげそりをしているとき、わたしの指をもう少しで切ってしまうところでした。彼は私の指にキスをして、私は自分を切ったりできない男の手に委ねられているということがわかりました。そのキスは私には祝福だったのです」(HRC 8.3)だがこれらの身体的行為において、つまり足を包む手、指のキスは母のかわりに父がしたものだった。1934年のマラマッドには心配してくれる母はいなかったのだ。

バーサ(元はブルチャ)・マラマッドは何年も統合失調症を病んだ後、1929年に精神病院で亡くなった。マラマッドは「父がグレイブセンド街の店で彼女を思って泣いていた」ことを記憶している。彼女が最初入院したのは1927年キングスカウンティ病院であったが、そこでは彼女はひどくみじめな状態であった。それで、マックスには経済的余裕はほとんどなかったが、クィーンズにある私立病院に彼女を移した。「彼女は、1929年、私がまだ15歳のときに死んだと思う」とマラマッドは書き、静かにこう付け加えている。「1929年5月母の日に」

その2年前、13歳の幼いマラマッドは学校から帰ってきて、清潔なキッチンの上に母親が倒れて口から泡を吹き、殺虫剤の空の缶がころがっているところを見つけた。彼は地元のドラッグストアへ助けを求めて走った。バーサはこの自殺未遂のしばらく後に入院し、二度と家には戻らなかった。

出産が彼女にはこたえた。3回の経験が、後には産後鬱と診断される状態だったのではないかと、マラマッドは考えるようになった。彼女は1912年に男児を死産した。そして1914年のマラマッドの出産で左足をひどく痛めた

可能性がある。ともかく、少年は自分が障害の原因となったのではと考えていた。だが、友達の前では、200ポンドもある太った母親が帽子を歪ませ奇妙な歩き方で、通りをめちゃくちゃな角度でびっこをひいているのを見られて、恥ずかしく思っていた。マラマッドはいとこの女の子が「母が車に乗ったとき、どんなに傾いたか」について「だれかにしゃべっている」のを聞いたことを、決して忘れることができなかった。(‘Family History’) (原注 バーナード・マラマッドが1976年に彼の家族の歴史について書いたノート。ジャナ・マラマッド所有。以降‘Family History’として示す)

1918年にはもう一人の男の子、ユージーンが生まれ、すべてが崩壊へと向かっていった。母親はまだいくらかは母親らしさを保っていた。1951年に、兄はこう書いている。「ユージーンは幸せな子ども時代を過ごしたと言えるかもしれない」

しかしながら、彼は過保護で「構われすぎ」だった。バーサは彼が5歳か6歳になるまで一緒に寝ていた。学校に行く年齢になるまで母が服を着せてやり、オーバーの脱ぎ着さえしてやっていた。5,6歳までユージーンの哺乳瓶をやめさせることができず、そのことを知った近所の子や親類にばかにされる標的となった。(HRC20.3)

最初の死産で失った息子のあと、バーニー(マラマッド)は特別扱いされる子どもであった。彼は機知に富んで頭がよく、学校が好きだった。

心配は伝統的には親としての義務であり、愛の証しかもしれないが、バーサの心配は正常なものではなかった。彼女は内気で神経質であり、(結婚前に)家を訪れてマックスの家族に会う事をこわがるほどで、後には、店に来るろくに知らない人に応対することにも怯えていた。夫より洗練された育ちの彼女は、清潔さに必死な

こだわりを抱いていた。のちに、彼女は他人が彼女のことを噂していると思ひ込み、警察官が町で彼女を尾行していると考え、マックスの共同経営者の妻が食料品店でレジから盗みを働いていると考えるようになった(おそらくこれはあたっているだろうが)。彼女はマックスが持ってきたラジオに怯え、しばしば店の裏の寝室に鍵をかけて閉じこもった。家庭生活は次第に悪化していったが、依然として強迫的に子どもたちの清潔さを維持していた。

マラマッドは客に肉を切つてやるときに誤って人差し指の先を切ってしまうという事故にあい、ユージーンと取っ組み合いをしたために前歯が欠けていた。しかし永続的な傷は、喪失と欠如からくるものだった。彼はあるとき娘のジャナに、「母がおりてきて映画に連れて行ってくれるのを友達と待っていた」ときのことを話した。

彼女(訳注 母)はそうしてくれると言ったけれど、具合が悪くて、部屋を出られなかった。みんないらいらして待っていた。彼(訳注 マラマッド)は恥ずかしかったんだと思う。友達に連れて行くって約束していたのでしょ。時間が過ぎて、彼女が来たときにはとっくに映画が始まっていたか、来たかどうかも確かじゃない。

大人になってから、父(マラマッド)は、きわめて強迫的に時間を守る人だった。一時間かそれ以上前に、かならず駅にでも空港にでも着いていた。母がディナーパーティに出かけるのを遅らせたりしたら、ときにはかかんになって怒っていた。彼は一番に到着することの多い客だった。(MFB、36)

マラマッドは時間に取りつかれたところがあり、常に遅れているという気持ちになって、遅れを取り戻さなければと思い、常に秩序のもたらず信頼性と精神の健全さを求めている。

困難な時に、娘時代の友人が二人、バーサに会いに来て、マックスと一緒に何とかよくなるように彼女を説得しようとした。子どもたちが彼女を必要としていたからだ。しかし彼女は返事をせず、話し始めると泣きだし、また二階へ上がってしまうのだった。バーニーだけが彼女についていき、「僕の前では彼女はにっこりして、若いころから知っているのに友達とも話ができない、と言って涙を流した」(HRC 33.8) 1983年に、家族の歴史を知ろうという長年の努力の一部として、マラマッドは母と仲の良かった義理の妹のアンナ・ファイデルマンと母の状態について話をしたときの断片的な記録を書きとめた。記録は過去の記憶から漂い出し、母に聞こえた声、母が見たと思った光景のようだった。

誰かが店に来ている。誰かが入ってきて彼女を見ている、彼女はアンナの目を決して見ようとしな。もし窓から外を覗いたら、自分を見張っている男が見える。彼はいつも私を見張っている。どこへ行こうと、彼の目が私の後を追ってくる。(彼の目が追ってこなければいいのに) (HRC 20.4)

彼女は邪悪な目を恐れていた。通りの人々に向かって喚いた。ユージーンによれば、「かあさんは悪魔に耳のうしろを噛まれたと言ってたよ」(ibid.)

マラマッドが友人のハワード・ネメロフの詩集 *The Western Approaches* (1975)についてメモしていたときに、突然自分自身の短い詩を書きとめた。彼女の死の実に45年以上後に。「雨の中/ママ」という題がついていた。

雨の中に行かないで
雨はだめ、息子よ、彼女は言った
さもないと、風邪をひくわよ
具合が悪くなるわ

だから雨の中にはいかないで
ママ、あなたが死んだとき
私は雨の中を歩いていた

(LCII 12.14)

「私は雨の中を歩いていた」は、ついに誰も彼を守ってはくれないことを意味していた。正常な生活をして自由な人間になることは、おおきなリスクを犯し、痛みと孤独とを共に感じることだった。必要な不服従であり、しかしまた喪失の叫びでもあったのだ。

この短い詩は『ドゥーピン氏の冬』(1979)第二章の散文の中に再び姿を現す。「雨の中には出ないで、ウィリー、雨はだめ。風邪をひくわよ。お医者さんが来るわよ。肺炎になるわよ。行かないで。ウィリー。雨の中には」その直前に、ドゥーピンの母が殺虫剤を飲んで自殺を図り、年若いドゥーピンが熱が出たために学校を早退して、彼女が清潔な床の上に倒れているところを見つけるくだりが書かれている。

彼は急いでドラッグストアまで階段を駆け下りて、パニックを起こして買ったクエン酸マグネシウム(訳注 クエン酸マグネシウムは一般には下剤であって、催吐剤ではないので、彼のパニック状態を示すものとも言える。)を一瓶飲ませて、吐かせようとした。

はい、彼女はかすれ声で言った。はい、はい。彼女は飢えたように、彼が差し出す奇跡の飲み物を命がけで求めていたかのように飲み干した。これで、また正気になれるかもしれない、健康で若々しく一今までの人生で手に入らなかったものすべてを手にするチャンスをつかみなおせるだろう。彼女はいやすことのできない飢えを飲み干した。回復したとき、彼女の灰色がかった髪が渦巻いていた。彼女は、絶対に二度としないと約束した。

ウィリー、私の頭がおかしいってパパには言わないで。ママ、そんなこと言わないで。

（『ドゥービン氏の冬』第二章）

母親には、不健康な状況における本能への自暴自棄なしがみつきがあり、息子には、知識と責任の早熟な痛みがあった。彼の後の人生における脆弱性の特徴がここにすでに存在する。飢えと渇きが強力に絡まりあう言葉、魔法への欲求、あるいはそれがなければ、すくなくとも第二の機会への欲求。草稿において、マラムッドは息子の最後の母への応答を最初に置いている。「もう何も言わないで。ぼくはまだ12歳なんだよ」そして「まだバーミツヴァも受けてないんだ」と。

正式なバーミツヴァーシナゴグで律法の一部を朗誦することで13歳のユダヤ人男子の成人式を祝うセレモニーはマラムッドには行われなかった。1980年にマラムッドは、書くことが自分にとって持つ意味についての回想録か、あるいはあたらしい連作短編のためのノートとして草稿を書き始めていた。その題名は「失われたバーミツヴァ」というもので、出版はされなかった。始まりはこうである。「私が12歳の時、ある日目が覚めて、バーミツヴァについてまったく何もしていないことにぎょっとした」彼は自分から何かを始めるわけにはいかないのだった。

私は父親にもうすぐやってくるバーミツヴァについて念を押した。「来年には13歳になるんだ。ぼくの知っているユダヤ人の子供たちはヘブライ語の授業を受けているけど、ぼくは受けていない。バーミツヴァ受けて欲しくないの？」父はなぜ私が腹をたてているのかな、という顔つきで私を見た。父は受けて欲しいし、そのために何かしてやると約束した。私はちゃんとやってほしいと言った。母は父に私の宗教教育をなおざりにしていることをきびしく非難した。父はちゃんとすと言った。「時期が悪いんだ。ちゃんとし

てやるから」何か月も過ぎても、父は何もしてくれなかった。店の奥に坐ってただ客が来るのを待っていた—あまり多くは来なかった。（「失われたバーミツヴァ」33.8）

教育を受けてはいなかったが、マックス・マラムッドは社会主義者で自由思想家であると自ら任じていた。彼はシナゴグに属していなかったし、神も信じていなかった。しかし、息子には自分で決めさせたいと考えていた。幼いマラムッドにとって、それは自由などではなく、どこにも所属していないというような感情なのだった。スーツを売り、タキシードのレンタルをしている、地元ブルックリンの仕立て屋上りの洋装店主の息子たち、レオンとサム・スナイダーとは慎重に友達付き合いをした。彼らと一緒にシナゴグに行き、だれが最初にトーラー（訳注 ユダヤ教の聖典とされるモーセ五書を収めた書物で、巻物の形をしている）にさわられるかを競い合ったりしたのだった。マラムッド自身はトーラーがパレードで運ばれているときに、その神聖な巻物に触れることが何を意味しているかはまったくわかっていなかったのだが。（訳注：シナゴグ内をおごそかにトーラーが運ばれるときに会衆はトーラーに触れることができる。また Hachnasat Sefer Torah と呼ばれる、新しいトーラーをシナゴグに納める行事ではトーラーはにぎやかなパレードで運ばれる）

私は金曜の日没時（訳注：ユダヤ教の安息日は金曜の日没に始まる。敬虔なユダヤ教徒は安息日にシナゴグに集まって礼拝する）にシナゴグで祈っているところを見たことがある、白いひげの老人に話をしてみようと決めた。自分がバーミツヴァを控えているのに、準備が遅れていて、助けがほしいことを話した。彼は誰が（バーミツヴァの準備のための）授業料を払うのかと尋ねたので、私は

ためらいながら父が払うと言った。老人は初級ヘブライ語教師で、もし父が授業に通常の料金を払ってくれるなら、私に教えてくれると言った。（「失われたパーミツヴァ」 33.8）

常に、マラムッドは自分の名前が「教師」を意味していることを誇りにしていたが、メラメッドとは、一般的には地位が低く、やる気のない子どもたちに初級ヘブライ語を教えるという存在なのだった。

父は授業料を支払うことには同意したものの、授業は低レベルなものだった。マッドはまず字を書くところから始めなければならなかった。というのも、ヘブライ語のアルファベットさえ知らなかったのだ。「私が間違えると、老人はテーブルの物差しをとって、私の手の甲を打った。私はびっくり仰天して、激怒した。私は泣かなかったが、大声で叫んだ」彼はこうした扱いには慣れていなかった。後に、マラムッドは、父マックスが、たいていは柔和な男だが、癩癩持ちだったと自分の子どもたちに語った。あるときマックスはマラムッド少年がベッドの下に隠れるまで箒で追いかけてまわし、そのあとで、体を丸めた少年を捕まえようとするが、少年は親指に感染症を起こして、守ろうとしていた傷口を差し出した。「この仕草は[マラムッド]に特徴的なものだった・・・彼は十分に苦しんだと感じたのだ」（MFB,24）マックスには少年の傷をさらにひどくする気には到底なれなかったのだ。

初級ヘブライ語教師は放課後に店に教えに来るようになり、母はときおり寝室から這うように出てきては壁に寄せた長椅子に座って授業を見守っていた。だから、ものさしを使う必要はさらに少なくなったのだ。

「この子の手を痛くしないでくださいな」母は老人に言った。

「夢の中では学ばませんぞ。ちゃんと勉強し

ていないときは、起こしてやらにゃ」と彼は言った。

「この子の手を痛くしないで」母は恐怖におののいて言った。

老人が帰ったあと、私は母にもう彼には会いたくないと告げたのだ。

（「失われたパーミツヴァ」、HRC 33.8）

マラムッドは両親から愛されていたことはわかっていたが、初級ヘブライ語教師によって受けた傷とともに、成人として認知される儀式を受けるといふ、明確に定義された生得の権利を享受する最後の機会は失われたのだった。

年老いた教師のあとを引き継いで、マックスは自分で少年にパーミツヴァを受けさせると約束して、「こういうことは知ってるんだ」と言ったものの、少年は疑わしいものだと思っていた。

13 歳になった日の朝、父は青い布袋にはいった一組の^{ヘブライ}聖句箱を手にして店から階段を上がってきた。こうしたものを見たことはなかったし、これ以降も目にしなかったのだから、誰かから借りてきていたのだろうと私は思った。（訳注：聖句箱とは聖句を書いた羊皮紙を収めた二つの黒い革の小箱で、ユダヤ人の男子が祈りの際に一つは額に、一つは左腕に紐で巻きつけて装着する、律法を忘れないための礼拝具）「今日おまえは 13 歳になる。パーミツヴァを受ける日だ」父は歌うように祈りを朗唱した。「天の神に祝福あれ、我々に十戒をもたらして神聖な存在とし、^{ヘブライ}聖句箱を着けるよう命じた神に」

父は私の右腕と頭の周りに聖句箱を巻きつけ、再び祈りを唱えた。

「私にならって祈りを唱えなさい」と彼は言い、彼がゆっくり朗唱する後について、彼が私に求める祈りを二人で唱え終わるまで、できるだけ正確に唱えた。

それから、父は私にキスをして、私はバーミツヴァを受けたのだと言い、来るかもしれない客のために、店へ降りて行った。「失われたバーミツヴァ」、HRC 33.8)

しかし成人となったはずの少年はレオン・スナイダーが手にしたものはもらえなかったのだ。儀式もなく、儀式の後でもらえる贈り物もなく、レーズンもナッツもなく(訳注:レーズンもナッツもユダヤ教の祝日でよく供される)、ケーキもワインもなかった。そうしたもののかわりに、彼が手にしたのは、不確かで部分的にしか形成されない大人としての地位だったのだ。

大人としての人格が最も明確に形成されたのは、13歳でキッチンの床に自殺寸前で倒れている母親を見つけて助けたときであった。二年後に母が死んだとき、父はマラマッドにどのように死んだのかは話さなかった。マックスはある朝「めちゃくちゃに早い」時間に起きて、バーニー(マラマッド)に「ママが具合が悪いから」学校には行かないようにと言った。ユージーンは学校に行かされたが、兄は店におり、「午後には母が死んだという電報が父から届いた」(「失われたバーミツヴァ」、HRC 33.8)後に、マックスはある種の病気だったと漠然と話した。マラマッドは、後年医療記録を検索して死因を知ろうとしたがうまくいかなかった。高血圧の記録もなく、彼女が雨で心配したような肺炎の記録もなかったので、心臓発作だった可能性もあった。だが、マラマッドはおそらく自殺だったのだろう、おそらくまた毒物を飲んだのだろうと考えていた。4歳下の弟ユージーンに死を知らせるのは15歳の彼の役目だった。「私たちは葬式のために彼のスーツを誂えに行き、袖を短くしてもらっている間、私たちは店の外へ出た。雨が降っていた。それから私は彼に告げた。すると彼は知っていると言った。彼は察していたのだ。私は泣きたかった」(アン・デ・キアラへの手紙、1942年7月)(原注:

アン・マラマッドには夫との手紙に自由にアクセスさせてくれたことに感謝している)2年も経たない内に、父はそれほどの喜びもなく再婚した。

私にはなんの祝いもなかった。大人になるため、自力で生きるために、この世に何の支えもなく漂い出た。

私には父を許すことはできなかった。

(「失われたバーミツヴァ」33.8)

「私はだまされたという気持ちだった—そもそも最初から裏切られていたと—その考えは特徴的なものになり、そう言い続けた」(原注:カート・レヴィアントとのインタビューより CBM、48)

しかしそれが最後の言葉とはならなかった。『生は人々とともに』の著者が書いているように、家族の諍いや誤解があっても、文字に表れない伝統では「人間の関係は持ちこたえるものだ」と期待されるものだ。どんなことにも最終的な終わりなどめったにありはしない(304)マラマッドは「失われたバーミツヴァ」をこう締めくくっている。

何年も経って、父を亡くしてかなり後になって、私は父が私にバーミツヴァをしてくれたのだということが理解できるようになった。儀式は私が望んだものだ—私は儀式が好きなのだ。歌も踊りもなく、父が布袋から取り出した聖句箱ですませた平日の登校前の朝には満足できなくて、儀式を求めたのだった。

彼は約束を守ったのに、私は大人になって、ある日、父は私が求めたものを与えてくれたこと、そうしてくれていたことが私には信じられなかったことを、悟ったのだった。

(「失われたバーミツヴァ」、HRC 33.8)

「大人になるまで」悟らなかつたという言葉は「大人になるために何の支えもなく漂い出

た」という、その前の一節を贖うものである。これは、書かれた言葉の上においても、そこから離れても、何度も考え直すような、困難な成長と痛みを伴うアンヴィバレンスの物語であり、何が彼を形成し、何が彼を傷つけるのかが、マラマッドにおいては別々に分けることができないことを語る物語である。移民の両親に対して、すべてのアメリカの息子たちが見出し、また見つけられず、反抗し、腹を立てるという古典的な第二世代の物語なのである。

1984年の70歳の誕生日に話を戻すと、マラマッドはこういうことについてほんの少ししか話していない。「母は幸せな女性ではありませんでしたが、子どもたちを愛していました。彼女は若くして死に、40代でした。子どもを愛することのできる親を持つということは私の想像力をふくらませる力なのです。幼い頃から、私は想像力豊かな子どもで、人生と世界について感じていることをあらわすために物語をかたる子どもでした」

打ち明けるかわりに、(自分にとって)命綱である「想像力」を頼りにしつつ、彼は自分の第二の家族への不器用な優しさで物語を締めくくった。「私がしたもっとも想像力豊かなことの一つはアン・デ・キアラと結婚したことです。私たちには良い時も悪い時もありましたが、愛によってずっと絆を保っていました。数週間前、アンは私に共感を込めて”Mir soll sein far dir”と言ったのです」「共感を込めて」の下に、彼は元々はこう書いていた。「何がしかの失望とともに」と。(HRC 29.6)すべての共感に対して、この過敏な男は、その底に潜む失望を本当には消すこともなく、それを隠したいという頑なな願望も消すことはなかったのだ。

イディッシュ語の'mir far dir'はこの点で父と妻を結び付けているものの、マラマッドはユダヤ人ではなくイタリア系カトリックのアン・デ・キアラと結婚することを決めたとき、無神論者の父がマラマッドを死んだものとし

て、shivah—死者への哀悼と祈り—を行ったことも知っていた。想像力とはリスクを冒すことを意味していたのだ。つまり、母や父がいても、雨の中を歩くことを。1945年11月6日ニューヨークの倫理文化協会ではアン・デ・キアラとバーナード・マラマッドは人前結婚式を行ったが、それもまた装飾や宗教のない儀式だったのだ。マックスは、1947年に孫のポールが、1952年にジャナが生まれたときにだけ、和解したのだった。

夫が父親に宛てて、自分の心に従うために人生をかけてなぜそうしたのかを説明する手紙を書いたこと、マックスがそれを生涯持ち歩いていたと言われていることを、アン・マラマッド自身は記憶している。『ドゥービン氏の冬』中の「雨の中を歩かないで」と同じ部分で、ドゥービンは父に宛てて手紙を書き、それが父が死んだときに身に付けていたことを書いている。「パパへ。もしユダヤ人が一人前の人間でなければ、どうやってユダヤ人でいられるのでしょうか？もし結婚したい女性をあきらめるならば、どうやって一人前の人間でいられるのでしょうか？」

略語 および出典

CBM: *Conversation with Bernard Malamud*, ed. Lawrence Lasher. Jackson: University Press of Mississippi, 1991.

HRC: Malamud Papers, Harry Ransom Humanities Research Center, University of Texas at Austin followed by box and folder numbers

LC: Malamud Holding, Library of Congress

MFB: Smith, Janna Malamud. *My Father Is a Book*. Boston: Houghton Mifflin, 2006.

TH: *Talking Horse: Bernard Malamud on Life and Work*, ed. Alan Cheuse and Nicholas Delbanco. New York: Columbia University Press, 1996.

Davis, Philip. *Bernard Malamud: A Writer's Life*. Oxford: Oxford University Press, 2007.

Malamud, Berard. *Dubin's Lives*. New York, Farrar, Straus & Giroux, 1979.

Rodgers Jr., Bernard F. *MELUS*. Vol.33. Iss.3. 2008. 195.

Smith, Janna Malamud. *Private Matters: In Defense of the Personal Life*. New York:

Basic Books, 1997.

Zborowski, Mark and Elizabeth Herzog. *Life Is With People*. New York: Schocken, 1952, 1962.

(本書の翻訳については、著者の Philip Davis 教授から快諾をいただいている。図書としての翻訳出版権等についてはオックスフォード大学出版局と交渉中である。)